

三立機械工業「廃電線リサイクル処理機」

ちば環境新時代

第1部③

複雑に絡まり合う廃電線と細かな銅のチップを見比べ、三立機械工業(千葉市稲毛区)の中根昭社長は、「自慢できる完成度」と笑顔を見せた。「日本で三社ほどしか取り組んでいないユニークな事業」と強調するのは、廃電線リサイクル処理機の製造だ。処理された電線は埋め立てられることなく再び電線として再利用できるため、産業廃棄物処理業者らの注目度は高い。

開発製品の一つ「WN-50型湿式ナゲット」では、家電や自動車などの廃電線を粉碎し、傾けた選別機に落とす上、振動や水を利用して「銅」のチップと、銅線を覆っていた「樹脂」に分別回収する。「傾けた選別機の角度が一度ずれるだけでも駄目」。研究を重ねた開発の結果、手作業で樹脂をはぐより、はるかに経済的に廃棄物を削減することが可能になった。

一台八百六十万円と高額

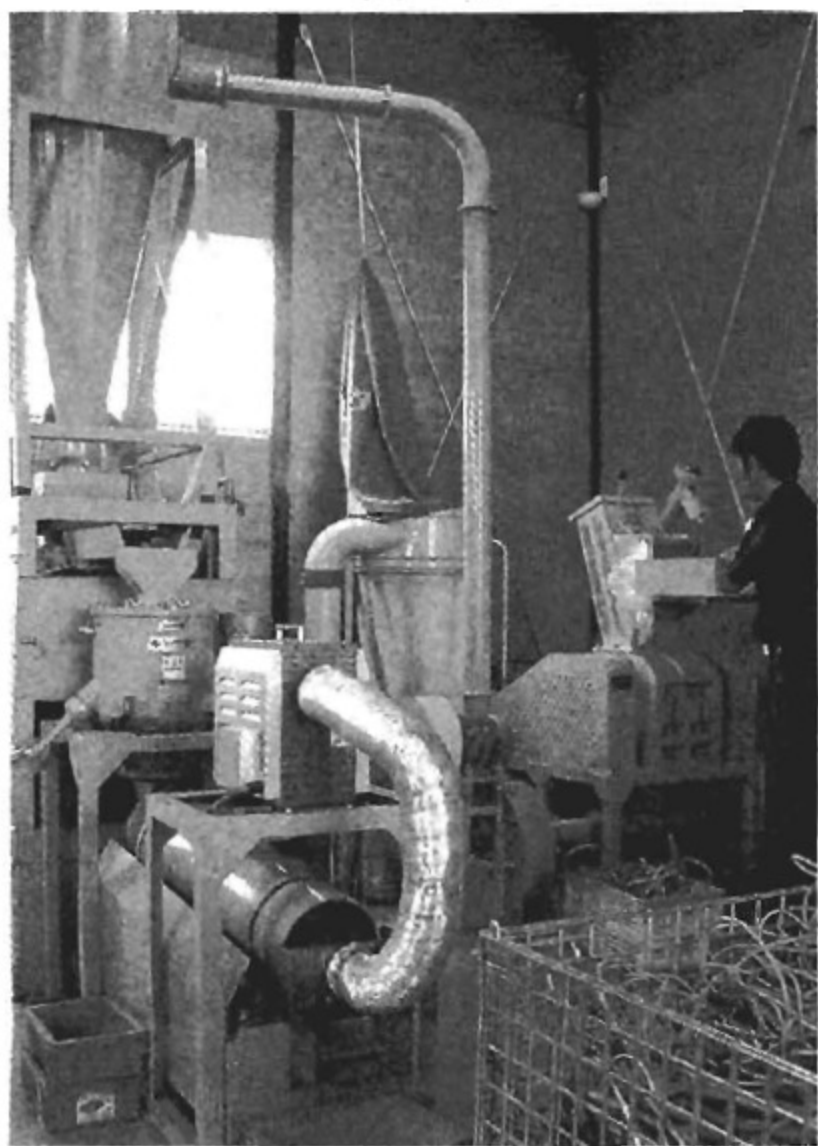
銅と樹脂分け、再利用へ

だが、剥離(はくり)処理済みの銅は、電線のまま処理業者へ引き渡す場合と比べ約三倍の価格がつくため、数年で元が取れるという。廃電線は銅と樹脂が一体だと再利用が難しく、いかにして両者を分けるかが、産業廃棄物や廃車の処理業者らの悩みだった。

従来は、樹脂を焼却し銅を取り出していたが、ダイオキシンなど有毒ガスが発生するため、埋め立て処理へとシフト。しかし近年は資源の再利用への関心が高まってきている。同社は早い段階で資源の再利用に着目し、創立から十六年目の一九七七年、廃電線のリサイクル処理機開発、販売事業へと特化。その道のパイオニアとして、

湿式ナゲットを含む約十種類の処理機を全国に向け年間約四百台販売する。「特」に二〇〇五年ごろから需要が急速に高まり、市場の更なる拡大が期待できる。課題は自動車の廃電線の樹脂部分にある。塩化ビニル、ポリエチレンなど多数の素材が使われているが、それらの完全な分別はまだ難しく、樹脂の一部は埋め立て処理されるのが現状だ。「事業としては未知数だが、その分完成度も高めていける」と語る中根社長。今後は樹脂分別や光ファイバーケーブルの再利用研究も進めていくという。

高まる需要、年400台販売



廃電線を粉碎・分別する「WN-50型湿式ナゲット」＝千葉市稲毛区

京葉銀行が無料で開催している、9月の「税務相談

12日＝柏コンサルティンクプラザ▽16日＝本八幡支店

直接。柏コンサルティンクプラ

両者の意見がほぼ平行線をたどる中、五回にわたる審議を重ね、答申は昨年より約二週間遅れとなった。

は五 けて 設 た。 半期 八千 備の スト 減収 7% を下 四減 幅は 三千 同期 くら による 一六 財

景長氏賞金よ 23日

間は 1時

4 6 日期注 企業統計